「ドラッグ・ロス」とがん治療

がん社会を診る

中川 恵一

前回取り上げた糖尿病の第一選択薬「メトホルミン」は、カロリー制限に似た作用を持ち、長生きやがん予防などの効果が期待されています。

米国立老化研究所の研究では、メトホルミンを投与したマウスはそうでないマウスに比べ、寿命が5%延び、がんの発症も減っていることが明らかになっています。

今、この薬が人間の寿命を延ばすかどうかに注目が集まっています。なにしろ、60年以上も前から使われていますから、安全性については太鼓判が押せますし、値段も1錠10円程度と安価です。

8万人近い糖尿病患者と、やはり8万人近い糖尿病ではない人を対象とした大規模な調査の結果、メトホルミンを服用している糖尿病患者は糖尿病でない人より長生きすることが示されています。

糖尿病でない高齢者がメトホルミンを服用することで、アンチエイジング効果が得られるかどうかの研究も始まっています。「メトホルミンによる加齢抑制」（TAME）研究が米国の15カ所の医療機関で進行中です。70～80歳の高齢者3千人を対象に、メトホルミンを服用する群と服用しない群に無作為に分け、5～7年追跡して調査しています。寿命の他、心筋梗塞などの心疾患、がん、認知症などの発症にどれだけ差が出るかを調べています。

イラスト　中村　久美

メトホルミンによるがん予防は、動物実験だけでなくヒトでも確認されています。膵臓（すいぞう）がんのリスクが6割も低下した他、肺がん、大腸がん、乳がんなど、多くのがんのリスクが低下すると報告されています。

メトホルミンの抗がん作用についての臨床研究も始まっています。ただ、あまりに薬価が安いため、製薬会社による「治験」によってメトホルミンが「抗がん剤」になることは期待薄です。

そもそも日本では、薬価抑制政策により、新しい医薬品の承認・販売そのものが困難になってきています。新薬開発の成功率は2万分の1以下で、時間とお金がかかります。わが国では、画期的な新薬でも薬価が低く抑えられるため、海外の製薬会社にとって、市場としての魅力が失われつつあります。

欧米で開発された新薬の7割は日本で承認されておらず、海外で使われている薬が日本で入手できない「ドラッグ・ロス」が、がん治療の分野でも問題になっています。

さらに、承認に際して、日本人を対象とした安全性調査を追加する制度がありました。海外メーカーが日本での治験を嫌う理由の一つでしたが、この制度は原則廃止される見通しとなりました。

がん治療薬の国際格差を、これ以上広げてはいけません。

（東京大学特任教授）